

平成23年

季刊

夏季号

Vol.39

亞東



楊進添外交部長主催・中華民國百年國慶酒會 於：臺北賓館



社団法人亞東親善協會

The East Asian Friendship Association

社団法人 亜東親善協会の概要

名称 社団法人 亜東親善協会

(英文名 The East Asian Friendship Association)

事務所 東京都千代田区平河町二一七ー五 砂防会館四階

(必要に応じ支部を設ける)

目的 会員相互の親睦並びに我が国とアジア諸国との

経済、文化の提携、交流を通じ、友好親善の増進を図る。

事業

① 我が国とアジア地域諸国との政治、経済、文化に関する調査研究及び講演会、研究会の開催並びに研究資料の出版

② 我が国とアジア地域諸国との文化、芸術の相互の紹介

③ 我が国とアジア地域諸国との経済協力の推進に必要な情報の収集及び幹旋

④ 我が国に在住するアジア地域諸国民の生活相談

⑤ アジア地域諸国からの在日留学生にたいする進学の幹旋

⑥ その他本会の目的を達成するために必要な事業

中華民國建國百年・協会法人化四十周年記念
季刊「亜東」二〇一二年 秋季号(第三十九号)

亜東親善協会の概要 ・ 目次

追悼 池田偵一郎副会長

崎谷秀彦

三頁

社団法人亜東親善協会設立趣意書

事務局

四頁

辛亥革命百年に想う

社団法人亜東親善協会会長

玉澤徳一郎

五頁

中華民國建國百年記念台湾訪問記

社団法人亜東親善協会副会長

張建國

六頁

中華民國建國百年

社団法人亜東親善協会副会長・参議院議員

大江康弘

九頁

觀光復興チャーター便

日本觀光庁と台湾觀光協会が交流

事務局

十三頁

社団法人亜東親善協会顧問・役員名簿

お知らせ・編集後記

・ ・ ・ ・ ・

十五頁

追 憶

池田さん

長い間お疲れ様でした・・・

先生と最初にお目にかかれたのは、内幸町、飛行館ホールでの素心会の勉強会でしたね、たしか寺部さんもお一緒だったと記憶しております。

素心会は、亜東親善協会創立者の千葉三郎先生が代表を務められた、保守派若手議員さんの会でした。先生はよく参加されていたようですが、

私の方は参加できる機会も少なく、後に協会の仕事を手伝うようになってから先生にお会いする機会も多くなり、色々ご指導いただきました。

先生はいつも、これからはアジアの時代だよ ！

アジアの自由・平和を守らなくては ！

と、よく言っていましたね・・・

日本はあの戦争を無駄にしちゃ駄目なんだよ ！

日本はアジアの指導者にならなくちゃ ！

と、よく言っていましたね・・・

協会のメイン事業である台湾との交流活動にも関心が高く、毎年実施する台湾訪問団にはいつもご夫妻で仲睦まじく参加され、私も何度かご一緒させていただく機会があり、昨日のように思い出されます。

その奥様に数年前先立たれ、落胆のご様子 掛ける言葉もみつかりませんでした。その後すっかりお元気になられ協会役員会にも遠路ご出席され、たまに役員さん達と懇親の席でワインを召し上がり、時間がくると“俺遠いからお先に失礼するよ”と席を後にし、ご自愛されている様子が伺われ、後から“先生、今度台湾にいきますよ”と声を掛けると“行こう”と返事が返ってきた。

今年になって、あまり体調がよくないと何度かお電話をいただき、その都度協会の先行きを心配され、新法人への移行は大丈夫か、組織固めは大丈夫か、等々 アドバイスしてくださり一度ご相談に伺いますと申上げると、調子のよい時近くまで出て行くよ、と言ってくれた・・・

10月2日、監事の荘司さんに同行して病院へ見舞った・・・

平成23年10月7日、天寿を全うして他界、享年90歳

池田先生 協会再建にご尽力下さり有難うございました

ほんとうに長い間お疲れ様でした

合掌

(*社団法人亜東親善協会副会長・理事 池田慎一郎先生)

社団法人亜東親善協会 専務理事 崎谷秀彦

社団法人亜東親善協会設立趣意書

現代は世界を挙げて大いなる“変化の時代”であります。その変化は、速度に於いて、規模に於いて、内容に於いて殆ど常人の予想を絶するものであります。21世紀は、措いて問わず、所謂1985年の世界が現在各国専門家の大問題となっております。

この大いなる変化は、同時に文明と民族の恐るべき運命の問題であります。その為に我々日華両国を繋ぐ道交の同志は、益々日華間従来の各種聯誼活動を盛んにし、特に経済について、あくまでも經世済民の本義に則らねばなりません。幸いに本会は年と共に久敬を加えて来ました。

亜東親善協会は昭和24年(1449年)8月2日、東京において創立された華南俱樂部が発祥であります。当時この俱樂部に参加した会員は、かつて華南において親しく交わっていた二十数名の日華人が中心でした。

お互いの国家的対立観念も、民族的抗争意識もなく、たゞひたすらに東亜人の平和と幸福及びそれを基調とする国際関係の樹立に努力してきた間柄でした。かかる友情と信頼は太平洋戦争後の混迷期にも立消えることなく反って燃え上がり、期せずして俱樂部の発足となったわけです。従って共に東亜民族としての兄弟愛を基調とする国際関係の樹立こそ華南俱樂部の生命であり、会員相互が何のわだかまりもなく、胸襟を開いて談じあえるところに大きな特徴があったわけです。

発足当時は会員も少なく、かつ社会的にも知られていない団体でありましたが、こうした崇高なる姿が巷間に伝わるに及んで、日本各地にいる中国の東北、華北、華中の出身者はいうに及ばず、東南アジア各方面の志を同じくする有志多数が参加を希望するところとなり、これまでの局地的な名称である華南俱樂部では不適當ということになり、亜東工商協会と改名いたしました。特に工商協会と名付けたのは封雑な政治情勢にかかわることなく、協会の性格が政治を超えた次元にたつことを鮮明にするためでした。

会員も個人的にはそれぞれの政治的立場もありましたが、協会としては個人の政治的立場や思想を持ち込まれて利用されることを強く反対してきたためです。

ただ会員個々の思想的な傾向を論ずるならば、自由主義陣営の同調者或いは同志であることは言うまでもありません。

かくして各方面の有志多数の参加を得た協会は、会員の犠牲的努力によって、留学生の指導、移住問題の解決、生活安定に対する協力及び商業上の紹介など顕著な成果を挙げ、なかでも毎月開催の例会において各界の人士を招聘して講演を依頼し、各国の政治・経済・文化の紹介に努め、その実績は高く評価されてきました。

今や創立21年を経過し、会を重ねること二百回を超え、所謂久しうして人之を敬するものであります。会員は日本国内はいうに及ばず東南アジア各地にも拡大され飛躍的發展の時期に達しました。

そのため本年度においては、さらに財政的基礎を確立し、役員にも新鋭を加え、いうところの70年代に臨む体制を作るべくここに亜東親善協会と改名し、新陣営で発足することとなりました。今後益々交を修め誼を正し、大いに経綸を行いたいと存じます。

昭和46年1月6日

社団法人亜東親善協会

設立発起人代表 千葉三郎

辛亥革命百年に想う

玉澤徳一郎

一九一一年十月十日に辛亥革命は、武昌での蜂起により始まり二百七十年続いた清朝は崩壊した。今年は、それから百年を迎えている。まずもって、辛亥革命百周年のお祝いを申し上げたい。辛亥革命をなしたとげた孫文には、当時、義士ともいえる多くの日本人が支援したが、残念ながら、日本政府は、支援要請をうけながらも、ほとんど何もしなかったに等しい。

このため孫文は、ソ連からの支援を受け入れたため、国民党と共産党は、共にソ連によるコミンテルンの支部となる。

孫文の三民主義は、民族、民権、民生をとえ、民主主義国家をめざすものであったが、今日一党独裁の中国共産党も国父孫文の「最も忠実な後継者」と胡錦濤主席に云わしめる素地をつくった。

また、革命によって孫文は中華民國の臨時大統領の地位につきながら、北洋軍閥を率いていた袁世凱にその地位を奪われた。そのため中国は軍閥が割拠する混乱した状況を招き、一九二五年孫文は、「革命未だ成らず」として死去する。

中国の統一は、孫文の後継者蒋介石總統によってなしとげられるのであるが、その北伐の途次に満州を基盤としていた軍閥の張作霖が、北京から満州に引揚げる際に、関東軍によって爆殺されてしまう。当時の日本の首相は田中義一であり、田中は、日露戦争の際、親露派の馬賊であった張作霖を日本側に引きこんだ縁で満州を張作霖をして間接支配することを目論んでいたと考えられるが、その構想は、関東軍という武断派によって崩されてしまう。

天皇陛下は、許可なく軍を動かした者の厳罰（死刑）を約束した田中首相が逆に軍の圧力を

うけて軽い処分しかできなかったことで田中首相を叱責し、そのため内閣総辞職となる。くみし易しとみた軍部は、次に満州事件を起し、満州国をつくりあげる。父を日本軍によって殺された張学良は蒋介石總統の指揮下に入り、西安に拠点を構える。

その頃蒋介石總統は、まず、共産党を討つて国内を安定させたのちに、日本及び外国の帝国主義に当るといふ政策をとっていた。しかし、西安にいる張学良は、父の敵を討ちたい一心であるから、共産党よりも日本軍と戦いたいと考えていた。そこに中国共産党からの誘いがあり、將總統をして坑日にむけて戦うようしむけるという工作にのることになる。

西安事件はこうしておこり、周恩来の提唱によって蒋介石總統のもとに共産党も参加しての抗日一本体制がでる。そして、共産党のしかけによって起きたのが、盧溝橋事件であると

私はみている。

毛沢東は、日本軍と中国軍（中華民國）と戦わせることによって、相方に傷を負わせ、自からの勢力は温存して、最後の勝利者になることを戦略としてとったといえる。

戦後、日本社会党の訪中団に毛は「日本軍閥のお陰で革命が成功した」と感謝の言葉を述べている程である。

かくして中国大陸は、中国共産党の支配することとなった。

今日、辛亥革命百年を中国は厳戒体制のもとに迎えた。マスコミは報じている。人権は認められず、大衆暴動は、年間十万件を超す程、治安が乱れ体制の維持に汲々としている。

これに対し、台湾では、盛大に百周年の祝賀がおこなわれた。どちらが孫文の三民主義の後継であるかは明らかだ。大陸に眞に人権が保証される時がくるまでは、「革命はいまだならず」なのである。

中華民國一〇〇年記念

訪問台灣旅行団手記

亜東親善協会副会長

理事 張 建國

中華民國一〇〇年、中華民國の国父である孫文が辛亥革命を成功させた一九一一年十月十日から一〇〇周年にあたる今年の十月十日、台北ではこれを記念する双十国慶大会が盛大に開催され、わが社団法人亜東親善協会も記念訪台団を組織しました。

十月九日、早朝午前七時十分発の中華航空機にて羽田空港を出発、予定より若干早く現地時間の午前十時前に台北松山空港に到着。台北は曇り、おかげで暑さはしのげる気温、九日は時々雨もぱらつく天候でした。

松山空港到着後、早速台北郊

外の観光地烏来へ。四十分ほどで烏来に到着しましたが、前日から雨の影響か、烏来の川の水量はふだんより多目、烏来の名物の滝もいっになく壮観でした。烏来では原住民タイヤル族の舞踊を鑑賞したあと、酋長村のレストランで、きれいな若い娘さんに囲まれながら昼食を楽しみました。



午後は宿舎の国賓大飯店で休憩後、台北市の新都心地区一〇一タワーの付近のビルの展望階にて開催された中華民国立法院院長王金平閣下の歓迎宴に出席。ここで日本から来訪した日華議員懇談会会長平沼赳夫氏を団長とする日本の衆参国會議員団、麻生太郎元総理を団長とする自民党青年局一行と合流した。

冒頭、王金平立法院長が歓迎の挨拶を述べ、辛亥革命一〇〇周年に当たる今年、日本の国會議員七四名含む、日華議員懇談会・自民党青年局・亜東親善協会が大訪問団を組織して訪台されたことを熱烈に歓迎するとともに、台北駐日代表処の札幌事務所の開設、東京羽田と台北松山空港間航空路の実現、故宮博



物院文物の日本における展示を可能とする法律の制定など、最近一年間の日本と中華民国台湾との友好関係の発展に対し、日本の衆参両院の国会議員諸氏の尽力に対し、深く感謝を述べられた。



今般の国会議員訪台団の団長である日華議員懇談会会長の平沼赳夫氏が、一〇〇年前の辛亥

革命において、中華民国建国の

父である孫文が当時の日本各界の重鎮である犬養毅、梅屋庄吉、頭山滿、宮崎滔天など多くの日本の友人の交流や支援について触れ、過去一〇〇年間の日本と中華民国との交流の基礎の上に、自由と民主主義という共通の価値観を共有する両国が、新たな一〇〇年に向けて手を携えて両国関係のさらなる発展に努めよう、と答礼の挨拶を述べられた。

次に麻生太郎元総理が挨拶され、祖父であられる吉田茂元総理と蒋介石元中華民国總統との長年の親交について触れられ、ご自身の新婚旅行が台湾であったこと、などのエピソードも紹介され、和やかな雰囲気の中にも盛會に歓迎宴がおこなわれた。

十月十日は、前日の小雨模様の天候も好転、天候は曇り、暑すぎることもなく、絶好の天候

に恵まれました。

我々は午前九時ここに總統府広場に到着。海外華僑や日本の友好団体などに用意された總統府前の「北広場」で式典に参列することとなった。

午前十時、大会主席の王金平立法院長が中華民国一〇〇年國慶大会の開会を宣言し式典が始まり、中華民国国歌の斉唱、王金平立法院長の挨拶に続いて、馬英九總統による中華民国一〇〇年双十國慶節演説がなされた。

馬總統は、一〇〇年前の今日、國父孫文の指導のもとに世界を震撼させた武昌起義の成功により、中華民国がアジア最初の民主共和国として誕生、辛亥革命の英雄、その後の建国から今日に至るまでの多くの無名の英雄たちの犠牲と尽力によって、國父孫文が理想とした自由、民主、

均富の社會が今日台湾において実現した、これを今後さらに発展させよう、と述べ、又、中華民国台湾の過去一年間の文化、經濟、外交など各方面における成果と國民の活躍を讃えた。



中国大陆との関係については、兩岸関係の平和が台湾の繁榮發展の必須条件であり、過去三年來、「統一せず。独立せず。武力

行使せず」の現状維持の政策の下、台湾海峡の緊張が大幅に低下、国際社会の支持を勝ち得た。

過去三年来、中国大陸とは十五項目の協議に調印、各項協議においてすべて「対等、尊厳、互恵」「台湾を主とし、人民に有利」を成し遂げた、と述べ、中国に対しては、双方が現実の基礎の上に、協力を進め、制度化された和平関係を築こう、と呼びかけた。

その一方、台湾海峡の平和を維持するためには、確固たる国防が必要であり、それでこそ台湾の安全が保障され、強固な軍備が、民衆が中国大陸との関係改善を図る上での後ろ盾になっていると述べ、国防の強化を訴えた。

最後に再び辛亥革命の理念について語り、中華民國の前途と台湾の未来は、我ら全国民の手の中にあり、台湾の更なる活力、

魅力、競争力のため、中華民國の次の一〇〇年に向かって全国民の団結、奮闘を呼びかけ、「中華民國萬歲」「台湾民主萬歲」と唱え、演説を締めくくった。

馬總統の演説に引き続いて記念のパレードが挙行され、今年はいくぶりに軍の機械化部隊が登場し、パトリオットミサイル



を含む各種のミサイル部隊の車両の行進が注目されました。



十月十日の午後には、總統府

から程近い台北賓館において、外交部長の主催により、各国の外交使節団、海外各国からの訪問団、海外華僑代表を招いての祝賀宴が盛大に挙行されました。今年は昨年の三倍に及ぶ二万人以上の海外華僑の参加があったため、台北賓館における祝賀宴には華僑関係者は代表幹部のみが招かれ、大部分の参加者は外

国の賓客が主体でありました。



日本の国会議員の方々は、ほぼ全員が十日の午後から夕方方便で帰国されました。

我が亜東親善協会の訪問団は、翌十月十一日、昼は台北市内の小籠包で世界的に有名な鼎泰豊で昼食をとり、夕方六時の台北松山空港発の中華航空機で、三日間の台湾訪問旅行を終えて帰国の途につきました。

社団法人亜東親善協会副会長
参議院議員 大江 康弘

この度の東日本大震災において、お亡くなりになられた方々に心より御冥福をお祈り申し上げます。また、被災されました方々にお見舞い申し上げます。

我々が今、やらなければならないことは、大変多くの課題を与えられています。もちろん早期の復旧、復興に向けて一丸となつて努力していくことは当然です。只、震災後お互いが目にし、耳にした「想定外」「未曾有」という言葉を聞かされ続けてきました。

想定外の地震、想定外の津波、想定外の原子力放射能漏れ等、今も使われ続けています。

確かにそうであっても、政治や行政の現場で、その言葉でもって今回の大震災において全て許されるのか。政治や行政の場

においては、どんな時でも「想定内」で問題解決を図る対応策を万全なものにしておくということではなかりません。

余りもの被害の甚大さに「想定外」という言葉が全てに免責を与えると勘違いをしないこと、これが、政治家や行政担当者が今、肝に銘じなければいけないと思います。只、思つた通り残念なのは予想された通り「想定内」であったことは、今の政権の「危機管理能力」や「政権運営能力」のなさであります。

案の定、危惧したように、震災後の対応は右往左往で全く人災と言つてよいくらいの情けな

い対応でした。このような政権しか持てなかったことも不幸なことと言わざるを得ません。

二年前に「政権交代」を叫び、国民の圧倒的な支持で政権についた民主党でしたが、結局は政権担当の準備もせず、経験も浅く、また日頃より役所や官僚、役人を目の敵にして批判をし、彼等と信頼関係が構築できず、結果として霞ヶ関の知恵・知識を十分に借りることができなかったことが、この非常時の対応を遅らせた原因でもあると言えるでしょう。

民主主義の社会においては、「政治家を選ぶ」という最も基本的なことは有権者の見る目、選ぶ目であり、大きな責任があると思います。

いたずらにムードに流されず、マスコミの報道を鵜呑みにせず、しっかりと自分の意志で選択をすることが求められます。

我々は多くの尊い命をなくした今回のこの災害にしっかりと学び、教訓として受け止め、今後に活かしていくことが、犠牲者の皆様方への答えすることでもあると思います。

【中華民国建國百年】

さて、今年は辛亥革命の勃発から丁度百年という大きな節目の年を迎え、台湾や世界の華人の人々にとっては特別な年となる。

この辛亥革命の「本家争い」を今、台湾と中国大陸とで演じているが、もちろん「台湾」

がその本家筋としての正統性を伝承する唯一無二の国家であると思っ

その「正統性」を主張している中国でさえも国内において四つの都市で「本家争い」を繰り返している。

北京語で口火を切ったことを意味する「首義」の武昌は現在、

武漢市の一部であるが、(当時この清国湖北省武昌城内で湖北新軍が反政府の暴動を起こしたが、これはその前には四川省に、おいて清朝政府の鉄道国有化に反対する運動が暴徒化した「四川暴動」が起き、この鎮圧のため清政府が武昌駐屯軍二個師団を送り出し、その間に武昌に残った清軍の革命派が反乱を起こしたのがきっかけである。

文字通りその後、清朝を倒し、アジアにおいて初めて共和国を建設した。辛亥革命の幕開けと

言える。清朝は十七世紀半ば満州族が清国本土に攻め込み、全国制覇し以後三世紀に渡り清国に君臨した中央集権的な専制王朝である。

この武昌においては三億人民元(約三七億円)を投じて辛亥革命博物館を建設し、本年(二〇一一年)四月にはオープン予定という。

また、孫文の故郷に近い広東省の「広州」では武装蜂起は失敗に終わったが、一八九五年に中国本土で最初である武装蜂起「広州起義」が起きた地で、辛亥革命は広州で始まり武昌蜂起は広州での延長線上であると主張し広州市内に記念館の建設を進めているという。

また、南京市は辛亥革命後、中華民国政府が樹立され(一九一二年)総統府がおかれた首都であり、南京市郊外の山陵には孫文の陸墓「中山陵」があり、

日本人の有力な孫文支援者であった。「梅屋庄吉」が制作した孫文の銅像が文革期には撤去されたが改めて、南京市内に立ち上げられ、その正統性を主張している。

そして四番目は上海である。孫文は武昌蜂起後、一ヶ月で貿易港であった上海を掌握、その後江蘇省や浙江省へと広がっていったが孫文自身も「武昌蜂起のあとで最も反響が大きく全国に影響を与えたのは上海だった」と述べたと言われている。

今、大陸中国では「武昌、広州、南京、上海」の四大都市が本家争いを演じているが、果たして、現在の共産中国が、軍備の近代化や増強を進め、覇権国家として帝国主義国家に変貌しているこの国に、元はと言えば「民衆に自由を」と言っ

家を否定し、清朝を倒し始めた。

辛亥革命の本来の意義を考えれば、民主主義制度のない、共産党一党独裁で帝国主義覇権国家を目指している中国には、辛亥革命百年を祝う「正統性」は全くと言っていいほど無い。

中華民国は馬政権が誕生して三年、中国人観光客の開放、三通(通信、通航、通商の自由)も完全実現し、また、昨年六月には自由貿易協定にあたる「兩岸経済協力枠組み協定(ECEA)の締結に至り、兩岸関係は急速に改善しているように見えるが、経済関係とは反対に台湾国内の民意は精神的に中国との距離は縮まっていないのが現状である。

「経済統一」をスタートさせ、次に「文化統一」そして最終は「政治統一」とステップ化させ

て中・台統一を進める腹つもりであり、そのツールの一つとして今年の「辛亥革命百周年」は大陸中国にとって「中台は一つ」という空気づくりには格好の材料であり共同記念行事まで計画しているようだが、馬英九総統もここにきて、「兩岸はそれぞれ祝えば良い。辛亥革命百周年は中華民国の建国百年、我々の立場はその建国百年を祝うものだ」と中国の申し出にははつきりと「(不ノー)」と表明。

これは中国の統一戦略には取り込まれない事をしつかりと意志表明した台湾側の確固たるメッセージと言える。

さて、ここで日本と辛亥革命について少し触れてみたい。明治維新と比べられることも多いが、一九六八年の明治維新から遅れること四三年、日本は孫

文達、革命派の人々には物心両面にわたる支援や貢献は大なるものがあつた。

まず支援者としては巨額の私財をなげうって孫文を助け続けた「梅屋庄吉」、一九〇〇年の「惠州起義」の戦いで亡くなった「山田良政」、親友として厚い信頼を置かれた「宮崎滔天(とうてん)」また、辛亥革命そのものへの貢献者としては北一輝、大隅重信、尾崎行雄、頭山滿等、多くの知名度のある人々が協力している。

また、孫文は神戸において「西洋の霸道か、東洋の王道か」と日本人に向けて一つの問いを發し、心から日中連携を求めたが、不幸にもその後日中は開戦へと進み、孫文の思いは残念ながら裏切られることになっていく。孫文は西洋的な教育を受けた革命家であつた。

彼が見る中国は泰平を現出した清朝治下の時代、人民にとつて皇帝政治の帝力・権力は彼等にとつて全く関係なくその政治に関わらないことが満足な境遇とされていた。

人民と皇帝との関係は、人民は「租税」を納めることだけであり、租税さえ納めれば自分達は責任を果たしたと思つていた。また、政府も人民が租税さえ納めれば他のことは構わず、その為中国人民の政治思想は極めて薄弱であつた。

このような社会に立脚すれば皇帝政治の必要はなく、中国にとつては共和制の実施こそが理想と説いた。

しかし、「三民主義」で説いた共和制移行への実施後も、彼が理想とする革命は達成されずその根本的な原因として、中国の人民には「家族主義」と「宗

族主義」はあつても「国族・民族主義」すなわちナショナリズムがないことを指摘し、その理由として「清朝時代」の統治形態に由来し、当時の人民が政治と切り離され、「なんら関係ない」立場、境遇に永らくおかれたため「人民の政治思想は薄弱」となり、国家の元に結集・団結できず、外国に対して伍する国家には出来できなかったと考える。

辛亥革命に至る孫文や中国の革命家達に最も大きな影響を与えたのが、日露戦争(一九〇四年二月〜一九〇五年九月)における日本の勝利と言えよう。

白人に対する有色人種である日本人、また、専制政治に対する立憲政体を持つ日本の勝利は、アジア諸国に多大な影響を与え、列強に植民地化されていく国々にとつては、日本に倣うことが

自らの国を救い富強を実現していくこととの意識を生んだ。

日本への留学も増え、日本を経由して西洋の知識や文物がアジアへと流れていったといわれている。

この日露戦争から遡ること一〇年前、日清戦争（一八九四年～一八九五年）の日本の勝利も世界を驚かせたが、なんと言ってもこの時代の前後は中国（清朝）において、人民が西洋的な国家観念に目覚めていった時期でもある。

李鴻章は袁世凱に指示し、朝鮮の従属化を進めていたが、ロシア、イギリスを巻き込み朝鮮半島はそれぞれの国が、睨み合う構図になっていた。

そして、一八九四年の春、朝鮮の新興宗教である秘密結社の

東学党が乱を起こす（東学党の乱）この時に朝鮮政府が李鴻章に援軍を依頼、このことが、日本が出兵する引き金となって結果、日清戦争へと繋がっていく。

日清戦争の勝利後の下関条約において三国干渉（ロシア・フランス・ドイツ）による遼東半島の清国への還付は、李鴻章や清朝政府のロシア取り込みの戦略で、これは功を奏したが、このロシアのその後の勢力拡大路線がイギリスの清朝離反を促し、親日路線への転換は、その後の義和団事変後（一九〇〇年）、日英同盟（一九〇二年）の締結へと進んでいく。

この義和団事変に至る背景は日清戦争後、列強による中国の分割は益々進み、「扶清滅洋」を唱えて、それに対する人民の危機感が内政革命の動きと排外の

気運の盛り上がりへと続き華北において外国人への襲撃を繰り返していた秘密結社の義和団が清朝政府と結びついて、一九〇〇年列強に宣戦布告。

八カ国連合と戦ったが大敗し、【義和団事変の際に是非言っておきたいことは、八カ国連合軍の中でも日本の軍隊は軍紀厳正、大変評判も良く、なかでも沈着冷静な働きをみせたのは日本陸軍の駐在武官であった柴五郎中佐である。禄高二八〇石の会津藩士の五男坊であり、一〇才の時辰辰戦争に際会し苦難を味わう。その後、薩長政府が作った陸軍幼年学校に入り、以後才覚を認められ陸軍軍人として頭角を現していく。

日英同盟（一九〇二年）の締結の理由は、英国としては戦略的なものも含めて色々あるが、こ

の義和団事変の際の規律高い日本陸軍の行動も、英国に与えた印象が大きかったと言われている。】

当時の人口一人あたり銀一両、総額四億五千万両もの賠償金を含む、北京議定書を受諾せねばならず、同時にこの後、国際的において中国の従属的立場が確定した。

李鴻章は北京議定書調印後、まもなく死去、一九世紀から二十世紀へと移行する中、時代も次へと進む。

この義和団事変は清朝国内において人民や革命家達に対して大きな影響を与え、同時に政府の権威失墜はそれまでの既成概念を大きく変えるきっかけとなる。

儒教的な世界観に基づく自尊

意識（中華思想）はナシヨナリズム的な観念へと転化、中国の亡国を救い主権を保持していくためには愛国主義、民族主義であるとの意識が目覚め、この動きは活発で、清朝政府を倒すという革命行動に繋がっていく。

そして、勃発した日露戦争の日本の勝利は中国国内の革命家達の背中を強く押すこととなり、その後の辛亥革命へと繋がっていく。

当時の国際環境の生み出す必然性とはいえ、中国と日本は共に有色人種であり、かたや列強の支配を受け、かたやその支配をはねのけてきた両国にとつては、力が支配する時代において、その後の進む方向が自ずと違っていくことは、少なからず予想されたとは言え、孫文も求めた日中友好への道も閉ざされ互い

が全面戦争へとつき進んでいく結果は誠に残念であると言わざるを得ない。

しかし幸いにも、今日、歴史的な大きな節目を迎えた台湾と日本の関係は過去のどの時代よりも友好的で信頼関係が強くなっていると言われている。

この事は、双方の政治家の努力は言うまでもないが、いつの世も政治の隙間を埋め、時には政治的対立で溝をつくることがあっても、その溝をそれ以上深くなるのを止め、補ってくれる存在がそれぞれの国の国民（民間人）である。

この人達の日頃の弛まざる努力や苦勞の積み重ねがあつて、初めて友好が本物となる。この事実を政治家は肝に銘じ重く受け止めるべきである。

観光復興チャーター便

震災の影響で訪日観光が大きく減少しており、このような中で、復興航空による東北地方（秋田・九月八日、花巻九月十六日十九日）へのチャーター便を復活運航させることとなった。

日本観光庁・溝畑宏長官、大江康弘参議院議員他、台湾観光局頼瑟珍局長、李鴻鈞立法委員、交流協会佐味祐介副代表、林明昇復興航空董事長による記者会見が八月十二日 台北・國賓大飯店で行われた。溝畑長官は、復興航空の決断に深く感謝し、各方面からの支援により、被災地は順調に復興を遂げており、どうぞ台湾の友人の皆様、安心して東北へ足をお運び下さいと呼びかけた。

観光局・頼局長は、七つのチャーター便で来台する旅客に、観光局からは小さなプレゼントを贈ることにしたと述べた。

日本観光庁と

台湾観光協会が交流

観光庁溝畑宏長官、並びに大江康弘・参議院議員等が訪台し、台湾観光協会・林清波副会長始め台湾インバウンド・アウトバウンド業者約二十名と日台交流会を開催し、両地の観光交流について意見を交換をした。

溝畑長官は、まず高額の復興支援に感謝し、お陰で被災地が着実に復興を遂げている、日台は、観光面だけでなくスポーツ・文化など他方面でも交流が盛んであると報告。

大江議員は台日の友情は震災後更に深まった。王金平院長が早期に北海道を訪問したことをあげて、感謝の意を述べた。

台湾の業者からは、次々に、日台観光をめぐって積極的な意見が提起された。

参加者はこれを機会にいつそこの友好関係強化を誓いあった。

社団法人亜東親善協会顧問

(五十音順・敬称略)

若林 正俊	山本 順三	山内 俊夫	村田 吉隆	松本 洋平	船田 元	林 幹雄	西村 真悟	中井 洽	田名部 匡省	高市 早苗	山東 昭子	坂本 剛二	岸 信夫	金子 恭之	奥野 信亮	遠藤 利明	魚住 裕一郎	石破 茂	麻生 太郎	安倍 晋三
鷺尾 英一郎	吉川 貴盛	山崎 正昭	森 喜朗	水野 賢一	古屋 圭司	平沢 勝栄	萩生 田光一	長島 昭久	谷川 秀善	高木 美智代	島尻 安伊子	笹川 堯	北村 茂男	亀井 久興	奥村 展三	大江 康弘	臼井 日出男	泉 信也	新井 悦二	愛知 和男
渡辺 博道	吉田 六左門	山根 隆治	矢野 哲朗	宮路 和明	前原 誠司	平田 健二	鳩山 邦夫	長勢 甚遠	谷川 弥一	高島 修一	下地 幹郎	佐藤 昭郎	小池 百合子	亀岡 偉民	嘉数 知賢	大野 松茂	内山 晃	岩城 光英	井上 信治	赤池 誠章
渡部 篤	吉村 剛太郎	山本 明彦	谷津 義男	村上 誠一郎	松下 新平	平沼 赳夫	浜 四津敏子	中村 喜四郎	鶴保 庸介	棚橋 泰文	世耕 弘成	佐藤 剛男	小島 敏男	神取 忍	金子 善次郎	大野 功統	江崎 洋一郎	岩屋 毅	伊藤 公介	秋元 司

社団法人亜東親善協会顧問 (順不同・敬称略)

馮 林	寄 錦	台 清	中田 宏	宏 村四郎	畠中 黄	篤 林	齋藤 瑞	毅 祥	毛 長	友 孝	次 則
楊 作	羅 王	明珠	李 海	天 政	施 梨	鵬 康	鄭 尊	仁	李 純	京	

社団法人亜東親善協会役員名簿

[会 長]	玉澤 徳一郎																			
[副 会 長]	張 建 國	張 碧 華	大江 康弘																	
[専務理事]	崎谷 秀彦																			
[事務局長]	南部 晴彦																			
[総務担当]	仲谷 俊郎	[組織担当]	益山 茂																	
[事業担当]	小松 省二	[国会担当]	橋本 靖男																	
[理 事]	千葉 健司	東 達夫	新井 秀子	李ハロルド	松永理恵子															
	多 忠和	三浦 信行	並木 正芳	伊野 雅晴																
[監 事]	荘司 隆一	藤山 雅康																		
[支 部 長]																				

[青森県]大見光男 [岩手県]高橋義麿 [茨城県]石川多門 [広島県]月村俊雄

【お知らせ】

- 永年当協会副会長をされた池田偵一郎理事、病氣療養中のところ、十月七日、天寿を全うし、他界されました。享年九十歳 合掌
- 中華民國留日東京同学会（台湾留學生）との懇談会・国会見学会は十二月七日・水曜日十一時より十四時まで開催いたします。
- 本年は協会法人化四十周年です。十二月七日懇親会を開催致します
- 本年は中華民國建国百周年で、雙十國慶節祝賀會が開催されました
- 九月三日台湾祭り 日本中華聯合總會主催 恵比寿ガーデンプレイス
- 九月十七日 中華民國建国百周年記念関東地区懇親会 Hオークラ
- 十月二日 東京地区僑學各界中華民國建国百周年國慶祝賀會 中華学校
- 十月四日 横濱華僑各會慶祝中華民國建国百年國慶酒會 ローズH横浜
- 十月六日 台北駐日經濟文化代表處・國慶祝賀レセプション Hオークラ
- 中華民國建国百周年・雙十國慶節奉祝訪台団は十月九日〜十一日開催
- 九日 王金平立法院長主催晩宴會に日華議員懇談会・自民党青年部と共に亜東親善協会も招待され、日本国奉祝団として紹介されました

【寄稿のお願い】

- 平成二四年「季刊亜東新年号」会員各位の台湾・協会に関する歴史体験談、旅行記、写真、ご意見等、ご寄稿をお待ちしております。一頁、一三〇〇文字。二頁、二六〇〇文字。写真も掲載可能です。メールにて十二月九日（金）事務局必着にてお願い申し上げます。

【編集後記】季刊「亜東」夏季号

- 張建國副会長の訪台祝賀団旅行記は、メール添付原稿でしたので、編集が容易で、校正が少なかったため助かりました。有難う御座います
- 協会の活性化の為、会員の拡充を図っています。会員各位よりのご紹介をお待ち致しております。宜しくお願い申し上げます。

【年会費】①法人五万円以上。②賛助会員三万円。③個人一万円。

表題【亜東】は中華民國總統馬英九閣下の御揮毫です

季刊 亜東 (アジアの架け橋) 平成23年 秋季号 (No.39)

発行日 : 平成23年10月15日

発行所 : 社団法人亜東親善協会

編集人 : 南部晴彦

所在地 : 〒102-0093 東京都千代田区平河町2-7-5 砂防会館4階

Tel:03-3261-6405 Fax:03-3556-5770

H P : <http://homepage3.nifty.com/atousinzen>

印刷 : ヨシダ印刷株式会社



私たちは、
「旅を咲かせる、花の翼」です。



CHINA AIRLINES

